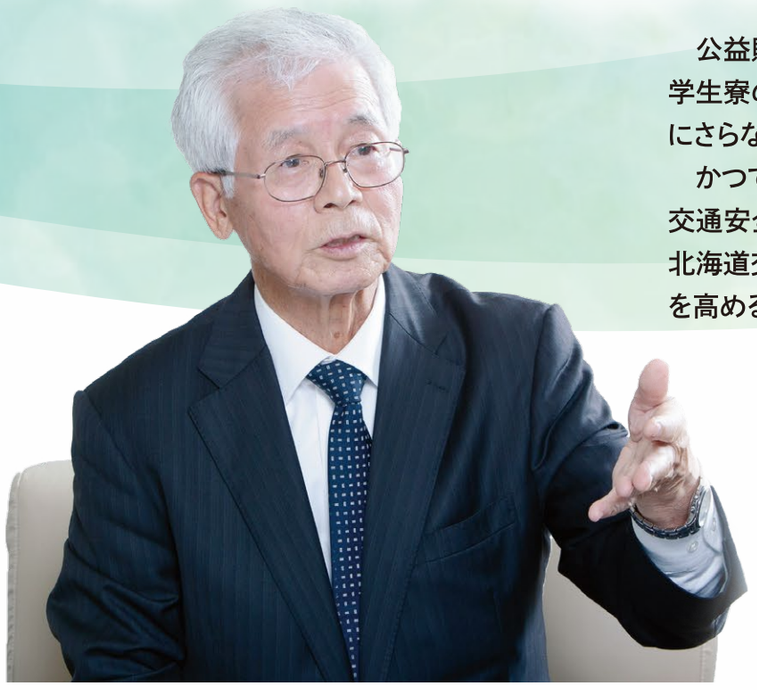
2023年7月13日 北海道新聞 掲載

企画制作／北海道新聞社営業局

ハンドルの重みは命の重み ～交通事故・飲酒運転ゼロに～



公益財団法人交通遺児育英会は、設立から50余年にわたり奨学金の無利子の貸与(一部給付)、学生寮の運営などで、交通遺児支援と交通安全の大切さを伝える。また、これまでの支援継続とともにさらなる給付型修学支援の充実、返還負荷軽減の追求に取り組み、交通遺児を支え続ける。

かつて年間交通事故死者数「全国ワースト1」という不名誉な記録が長く続いた北海道。さまざまな交通安全の啓発活動を担い、併せて北海道における交通遺児への支援を行ってきた公益社団法人北海道交通安全推進委員会の勝木紀昭会長と、交通遺児育英会の石橋健一会長に、交通安全意識を高めるための取り組みについて語ってもらった。

交通遺児育英会
会長
石橋 健一 氏

いしばし・けんいち　1942年生まれ。北海道大学工学部卒業後、日新製鋼入社。呉製鉄所エネルギー技術課、本社人事部などを経て、96年交通遺児育英会に出向。事務局長、専務理事、理事長を歴任し2023年6月より現職。

×

北海道交通安全推進委員会
会長
勝木 紀昭 氏

かつき・としあき　1953年生まれ。東京国際大学卒業。2022年6月より現職。この他、北海道エネルギー㈱会長、全日本スキー連盟会長、北海道スキー連盟会長、札幌スキー連盟会長を務める。

北海道の交通事故死、みんなで「ゼロ」を目指す

勝木　交通遺児育英会発足の経緯を教えてください。

石橋　戦後のモータリゼーションは、わが国に繁栄をもたらす一方で「交通戦争」と呼ばれる負の遺産をもたらしました。昭和40年代になると交通事故で亡くなられる方が増え、1970年には交通事故死亡者数は1万6765人とピークに達します。交通遺児が非常に増え、「子どもをせめて高校だけは行かせたい」という遺族からの声で、全国に交通遺児を励ます会ができるようになりました。そういった励ます会の活動や声が全国的に広がり、68年に国会でも支援組織をつくる決議がなされ、翌69年5月に交通遺児育英会が発足しました。

勝木　北海道では1869年に開拓使が設置され、本格的な開発が進められました。当初は交通の中心は鉄道でしたが、その後、車社会がどんどん発展していく中、積雪寒冷地ゆえのスリップ事故が多発、また広い大地ということもあり、スピードの出し過ぎでの事故も増えました。このことに危機意識をもった1962年、前身である交通安全道民運動推進委員会が任意団体としてスタート、70年には北海道が交通事故死亡者数ワースト1になり、この汚名返上と北海道の交通安全の実現を目指すため、75年に官民あげた組織として法人化し今の名称になりました。現在179の道内全市町村、76の業界団体、62の企業が会員として参加し、北海道庁や道警察をはじめ、さまざまな機関と連携しながら交通安全運動を展開しています。

石橋　北海道の交通事故件数、死亡者数の現況はいかがですか。

勝木　記録が残る中で最多となったのは1971年。年間889人の尊い命が交通事故で失われ、当時は負傷者も3万人を超えるような状態でした。その後、関係機関や各地の皆さんが地道な運動を続け、昨年の死亡者数は115人まで減少しましたが、この数字を早い時期にゼロにすることを目標にさらなる活動を続けています。

石橋　交通事故を防ぐにはドライバーも歩行者も安全意識を高く持つことが求められますが、北海道交通安全推進委員会ではどのような意識啓発活動を行っていますか。

勝木　毎月15日の「道民交通安全の日」や季節ごとの四期四十日の交通安全運動期間などには、集中的に啓発運動を行っています。「春の全国交通安全運動」の初日には、道路交通法の改正があったばかりの自転車ルールを伝えるため、元スキージャンパーの原田雅彦さんや東海大学のスキー部の学生さん、デリバリー業界の皆さんなどに参加いただき、みんなでヘルメットを着用して街中を自転車で走りました。われわれ大人が若者や子どもたちへ交通ルール順守の模範を見せることと、「心が動く活動」をタイムリーに行うことが大切だと考えています。また道内の自治体では、「交通事故死ゼロ」を継続する目標を持って運動を展開しており、昨年6月には西興部村が最長の1万日を達成しています。ただ、交通事故は残念ですが北海道から無くなっていません。突然家族を失い、交通遺児になる方もいます。

交通遺児育英会の支援活動

勝木　全国の子どもたちを応援している交通遺児育英会の活動についてお聞かせください。

石橋　現在全国で944人、うち北海道では27人の交通遺児を経済支援していますが、給付の拡大や返還免除など、奨学金返還の負荷を減らしていく支援策を強化してきました。2020年からは大学生以上の奨学生を対象に月額2万円の奨学金給付を開始し、今年4月からは高校生にも月額1万円の給付を実現しました。また今般はコロナ禍に対応し、20年6月に20万円の一時的な支援金を給付し、その後22年10月までに10万円を4回と計5回にわたり60万円の一時金を給付することができました。コロナ禍の対応以外にも現役奨学生に対し、自宅外通学者への家賃補助として月1万5千円の給付や、高校奨学生への上級学校進学受験費用補助を上限5万円まで給付。普通自動車第一種運転免許および準中型自動車第一種運転免許の取得費補助などもあります。17年からは、生活保護受給者と住民税非課税者を返還免除対象にしたり、返還者の経済状況に寄り添う対策の充実と状況把握に努めています。現役生家計負担、そして社会に出たOB・OGの返還負荷をいかにしてさらに軽減できるか検討を続けていきます。

勝木　北海道の子どもたちも支援していただきありがとうございます。経済的支援以外にも奨学生を支える活動をされていますね。

石橋　学生が一番多い東京や関西の奨学生向け学生寮「心塾(こころじゅく)」を運営しています。これは朝夕食付きで月1万円～2万5千円の寮費で、東京、関西合わせて92人の奨学生が利用しています。またコロナ禍で控えていた無料出張講演を再開しました。先般もあるタクシー会社から依頼があり、交通事故の被害体験を母子双方の立場から話してほしいということで、ドライバーの皆さんの交通安全意識を高めることを目的に無料出張講演をさせていただきました。小規模の集まりにも対応できるよう講演内容の一部をDVD化し、コンテンツを広げて講演実施件数の増加に備えています。奨学生と保護者がそれぞれの立場で交通事故被害体験を語ることで、交通遺児家庭に対する一層の理解と安全運転意識を高められると期待しています。高校奨学生の「海外語学研修」も再開しました。これは費用全額を交通遺児育英会が負担し、英会話能力の向上と異文化体験を目的に今年は20人が夏休みの3週間、米国でホームステイをしながら語学教室に通うものです。このプログラムは奨学生たちの精神的な成長の場として高い評価を受けています。「高校奨学生と保護者のつどい」も再開しました。「つどい」は厳しい体験をされた方々同士が交流する貴重な機会で、癒されたり安心を得たり将来を考えるきっかけづくりの場として好評です。地域限定の少人数の「つどい」として「語らいカフェ」の実施もますます増やしていきたいと考えています。

北海道の子どもたちの未来を応援したい

石橋　北海道交通安全推進委員会でも4月から支援体制を強化されたとお聞きしています。

勝木　私どもは、これまでの貸付型奨学金に加え、この4月から新たに、交通遺児になって間もない子どもたちへの「お見舞金」と、返還のいらない「給付金」の仕組みをつくりました。子どもたちには夢を諦めずに未来に向かって羽ばたいてほしいという思いから、「給付金」は乳幼児から中学生までの子どもたちの健やかな成長を応援するものです。全国組織である交通遺児育英会のほかに、北海道内には私ども以外にも「北海道交通遺児の会」などの支援団体があります。こうした機関と連携し、社会全体で補完し合い、切れ目のない応援を実現したい、そして、これからは交通遺児が一人も増えていかないよう、みんなで交通安全の輪を広げたいと考えています。

7月13日は「飲酒運転根絶の日」

石橋　今日7月13日は「飲酒運転根絶の日」ですね。

勝木　2014年に小樽市で、翌年には砂川市で飲酒運転による死亡事故がありました。この悲惨な事故をきっかけに「北海道飲酒運転の根絶に関する条例」が成立し、小樽市で事故のあった7月13日が「飲酒運転根絶の日」と定められました。この日は道内各地で決起大会が開催され、「飲酒運転をしない、させない、許さない、そして見逃さない」を合言葉に改めて気持ちを引き締めます。これからも、北海道が一丸となって〝みんなで飲酒運転ゼロの北海道〟を目指して活動を続けて参りたいと考えます。

石橋　私どももこの「飲酒運転根絶の日」の決起大会にはいつも参加させていただいていますが、これを機に全国のドライバーの皆さんの安全運転意識を高めていくことが大切だと思います。以前、事故被害体験を語ってくださったお母さんの「ハンドルの重みは命の重み」という心に響く言葉があり、ドライバーの皆さんにもこの言葉を胸に運転していただきたいと思います。私どもも交通遺児を一人でも増やさぬよう、引き続き地方公共団体や民間企業などが主催する交通安全啓発活動に積極的に参加し、交通安全の大切さを訴えていきたいと思います。

奨学金で充実した学生生活

札幌市　S・Mさん

私は、札幌市内の大学で経営学を学ぶ2年生です。中学生の時に交通事故で突然、尊敬する父を亡くしました。心が折れてふさぎ込みましたが、母と姉と励まし合いながら何とかここまでやってこれました。交通遺児育英会の奨学金で大学に進学できた姉の勧めもあり、私も奨学金を利用しています。高校時代の恩師がこの大学の卒業生で、同じ大学で同じ学問を学びたいと思いました。経営学は非常に奥が深く、企業や世の中の仕組みが分かります。勉強以外にもアルバイトをしたり、プログラミングのメンターをしたり、充実した学生生活を送れているのは、周囲の理解協力と交通遺児育英会の支援のおかげです。将来は学んだことを生かせる職に就いて、いつか結婚して幸せな家庭を持ちたいです。交通事故死は当人も家族も周りもみんな一瞬で不幸になり、この世にあってはならないことです。私自身も交通安全意識を高く持ち続けたいと思います。

<各団体の支援事業・育英事業>

●公益財団法人 交通遺児育英会

●公益社団法人 北海道交通安全推進委員会

●公益社団法人 北海道交通遺児の会

あしながおじさん　進学したよ
出会えてよかった　交通遺児育英会®

交通遺児育英会は1969(昭和44)年に設立されました。50年以上にわたり、保護者が道路上の交通事故が原因で亡くなったり、重度の後遺障がいのため、経済的に修学が困難になった子どもたちに奨学金を無利子で貸与(一部給付)して、高校や大学などへの進学を支援し、社会有用の人材を育成することを目的に活動している民間の団体です。大きく5つの事業から成り立っています。
①奨学金の無利子貸与(一部給付)②奨学生の指導および育成と交流③学生寮「心塾(こころじゅく)」の運営④修学支援金の給付⑤交通安全推進運動への協賛・協力、無料出張講演等。その他、広報紙「君とつばさ」を年5回発行しています。

高校奨学生と保護者のつどい

学生寮「心塾」での成人式

米国での「海外語学研修」

学生寮「心塾」新東京寮(令和6年オープン予定)

ハンドルの重みは命の重み® ―交通事故・飲酒運転ゼロに―
公益財団法人 交通遺児育英会
「あしながおじさん」募集中！― お問い合わせ
遺贈・寄付のお問い合わせ TEL.0120-521285
交通遺児育英会 検索 https://www.kotsuiji.com